

琉球新誌

圖附

下

ル 4  
4524  
2



門 4  
4524  
卷 2



琉球新誌卷下

封貢

大槻文彦氏著

推古ノ朝ヨリ寧樂朝ノ末ニ至ルマデ南島陸續朝貢  
シ、屢各島ノ君長ニ祿位ヲ賜ヒ或ハ征討慰撫ス、後太  
宰府ノ所轄トナルヨリ直ニ其府ニ貢獻ス、其後往々  
離叛シ、六條高倉ノ朝ニ至テハ半ハ既ニ叛ク、賴朝ノ  
鬼界島ヲ伐シヨリ聲息相絶エ、足利氏ハ中世ニ至リ、  
再ビ相通ジ、明ト足利氏ノ間ニ周旋シ、嘉吉元年足利  
氏始メテ琉球ヲ島津氏ニ属セシメ、常ニ兵庫ニ来リ、  
三年一貢ス、其後又絶エ、豊臣氏ニ至リ復通ジ、屢參洛

東京大学 図書館  
昭和 34.10.2 受  
藏 書

慶長十四年、島津氏其不貢ヲ征セシヨリ、徳川氏更ニ琉球ヲ島津氏ニ賜ヒ、其臣属トス、爾来國王嗣立ノ時ハ幕府ノ教ヲ以テ、島津氏之ヲ封ジ、乃チ恩謝使ヲ来シ、又將軍襲職ノ時ハ、賀慶使ヲ来ス、共ニ王子ヲ正使トシ、親方ヲ副使トシ、從者數十人、大抵ハ魔島ヨリ九州西海ヲ廻リ、下ノ関ヨリ大坂伏見ヲ過ギ、美濃路ヨリ、東海道ヲ歴テ、東都ニ至ル、官ヨリ驛馬ヲ給ス、未朝多クハ冬月ナリ、芝ノ薩郎ヲ旅館トス、登城ノ日ハ、往復外、櫻田ノ薩郎ニ放テ、冠服ヲ装束ス、俗ニ装束屋敷ト云、明服ヲ用ヒ、正使ハ王服ニ擬ス、副使贊議官以下、儀衛音樂ヲ用ヒ、島津侯之ヲ率ヒ、重臣兵士護衛ス、將軍已ノ刻ニ、大廣間ニ面ス

長袴ヲ着ス、献物ハ、大抵、太刀、駿馬、壽帶、香龍涎香、香餅、太平布、芭蕉布、青貝、卓羅紗、縮緬、泡盛等ナリ、正副使モ亦進献アリ、後、再ビ日ヲ期シ、登城シ、散樂ノ宴ヲ賜ハル、又初メハ、使臣、必ズ日光山ヘ詣スルヲ例トセシガ、寶永七年ヨリ、日光ヲ止メ、上野ノ東照宮ヲ拜スルヲ例トス、又滯都中ハ、幕府ヨリ米二千俵ヲ給セシト云、帰國ノ時ハ、島津侯、又率テ登城ス、大廣間中段ニ、賜物ヲ列シ、正使、次間ニ坐ス、閣老、台意ヲ傳ヘ、次ニ三間ニテ、正使ニ賜物ヲ傳フ、大抵、國王ニ白銀五百枚、綿五百把、正使ニ銀二百枚、時服十枚、其餘ニ銀三百枚ヲ賜フト云、國王ノ奉書ハ、松平薩摩守内中山王某ト書シ、閣老ニ

呈シ、將軍ニ達ス、之ヲ披露状ト云、今寛文ノ書例ヲ舉  
グル、左ノ如シ

謹而令呈上一翰候、抑去歳吾薩州之太守光久奉鈞  
命、而予嗣琉球國之爵位、為奉述賀詞使、小臣金武王  
子附于光久、献上不腆之土、宜候、伏冀以諸大老之指  
南可達、台聽儀奉仰候、誠惶不宣、

寛文十一年五月廿五日 中山王尚貞判

板倉内膳正殿 連名畧ス

使、佾金武未貢、芳簡披閱、面話唯同、抑去年從薩摩國  
主光久、就申達琉球國傳封之旨、為安堵之賀儀、被獻  
進土、宜件々、使者奉之、登堂如數披露之、奉備台覽之、

處、使者被召出、而奉拜御前畢、御氣色殊宜、幸甚、  
可被安堵、遠懷猶亦論、使者畢、不宣、

寛文十年八月九日 從四品侍從兼内膳正源朝臣重矩

回報 中山王 館前 連名ハ畧ス

島津氏ニ琉球  
在藩ノ任ヲ重  
ズ、貴族ノ子  
レハ必用ノ人  
ナリト云

島津氏嗣立ニハ、亦別ニ使臣ヲ来シ、賀儀ヲ致シ、  
琉球館ヲ置キ、常ニ國臣ヲ在勤セシム、又島津氏ヨ  
リハ、例年ニ鎮撫ノ官吏ヲ沖繩ニ置ク、其餘ノ遇待、家  
臣ニ異ナラズ、書ヲ奉ズレハ、執政ニ介ス、偶一書例ヲ  
得タリ、俗文ヲ憚ラズ、左ニ舉グ、

一筆致啓、達候、去歳雄五郎様御男子御出生、省之進  
殿、御名被進、島津兵庫殿嫡子又八郎殿養子被仰出、

御引越被為濟候之旨承知仕、恐悦奉存候御祝詞為可申達、如斯御坐候、恐惶謹言、

卯月三日

中山王 尚温判

島津登殿

案ズルニ、尚温ノ名、系統ニ見エズ、一書ニ、寛政八年尚温恩謝使トモアリ、尚成ト同人カ、後考ヲ俟ツ、徳川氏ノ世ニ在リテ、慶長ヨリ嘉永ニ至ル、未朝凡ソ二十回ニ至ル、左ノ如シ、

慶長十五年	尚寧入朝
同十六年	使臣入朝
寛永十一年	尚豊賀慶正使佐敷王子、恩謝正使金武王子
正保元年	尚賢賀慶正使金武王子、恩謝正使國頭王子
慶安二年	尚實恩謝正使具志川王子
承應二年	同 賀慶正使國頭王子

寛文十一年	尚貞恩謝正使金武王子、副使越未親方
天和二年	同 賀慶正使名護王子、副使恩納親方
寶永七年	尚益賀慶正使美里王子、恩謝正使豊見城王子
正徳四年	尚敬賀慶正使與那城王子、恩謝正使金武王子
享保三年	同 賀慶正使越未王子、副使西平親方
寛延元年	同 賀慶正使具志川王子、副使與那原親方
寶曆二年	尚穆恩謝正使今歸仁王子
明和元年	同 賀慶正使讀谷山王子
寛政二年	同 賀慶正使野濱王子、副使幸地親方
同八年	尚成恩謝正使大宜見王子、副使安村親方
文化三年	尚顯恩謝正使讀谷山王子、副使小祿親方
天保三年	尚育恩謝正使豊見城王子、副使澤城親方
同十三年	同 賀慶正使浦添王子、副使座喜見親方
嘉永三年	尚泰恩謝正使玉川王子、副使野村親方

慶長十五年ハ、尚寧自ラ入朝ス、爾後ハ皆使臣ナリ、唯寛永十一年ハ、將軍上洛ス、因テ使臣二條城ニ謁シテ帰ル、○大政維新ノ後、明治四年七月ヨリ、琉球諸島ヲ

鹿兒島縣ノ管轄トス、五年九月、尚泰ノ賀慶正使、伊江王子、副使、宜野灣親方、贊議官、喜屋武親雲上以下凡ソ四十人、東京ニ着ス、十四日、午後第一時、三使參朝シ、外務卿、式部助之ヲ引キ、太政大臣、諸省卿等列立シ、皇上ニ拜謁ス、尚泰ノ上表ニ曰、

恭惟、皇上登極以來、乾綱始張、庶政一新、黎庶皇恩ニ浴シ、歡欣鼓舞セサルナシ、尚泰南陬ニ在テ、伏シテ盛事ヲ聞キ、懽懽ノ至リニ勝ヘズ、今正使尚健副使向有恒、贊議官向維新ヲ遣シ、謹ンテ朝賀ノ礼ヲ修メ、且方物ヲ貢ス、伏メ奏聞ヲ請フ、

明治五年壬申七月十九日

琉球尚泰謹奏

貢物ハ、唐筆墨硯画、上布、綸子、縮緬、純子、青貝箱、燒酎等ナリ、別ニ皇后ヘ上表、献物アリ、使臣等モ、亦自ラ皇上ヘ献物アリ、共ニ嘉納ノ敕語ヲ賜フ、次ニ外務卿、冊封ノ詔ヲ宣讀ス、詔書ニ曰、首ニ大日本國璽ノ印アリ、尾ニ天皇御璽ノ印アリ、朕、上天ノ景命ニ膺リ、万世一系ノ帝祚ヲ紹ギ、奄ニ四海ヲ有テ、八荒ニ君臨ス、今琉球近ク南服ニ在リ、氣類相同ク、言文殊ナル無ク、世々薩摩ノ附庸タリ、而シテ爾尚泰、能ク勤誠ヲ致ス、宜ク顯爵ヲ予フベシ、陞シテ琉球藩王ト為シ、叙シテ華族ニ列ス、咨爾尚泰、其レ藩屏ノ任ヲ重シ、衆庶ノ上ニ立テ、切ニ朕ガ意ヲ體シテ、永ク皇室ニ輔タレ、欽ヨ哉、

明治五年壬申九月十四日

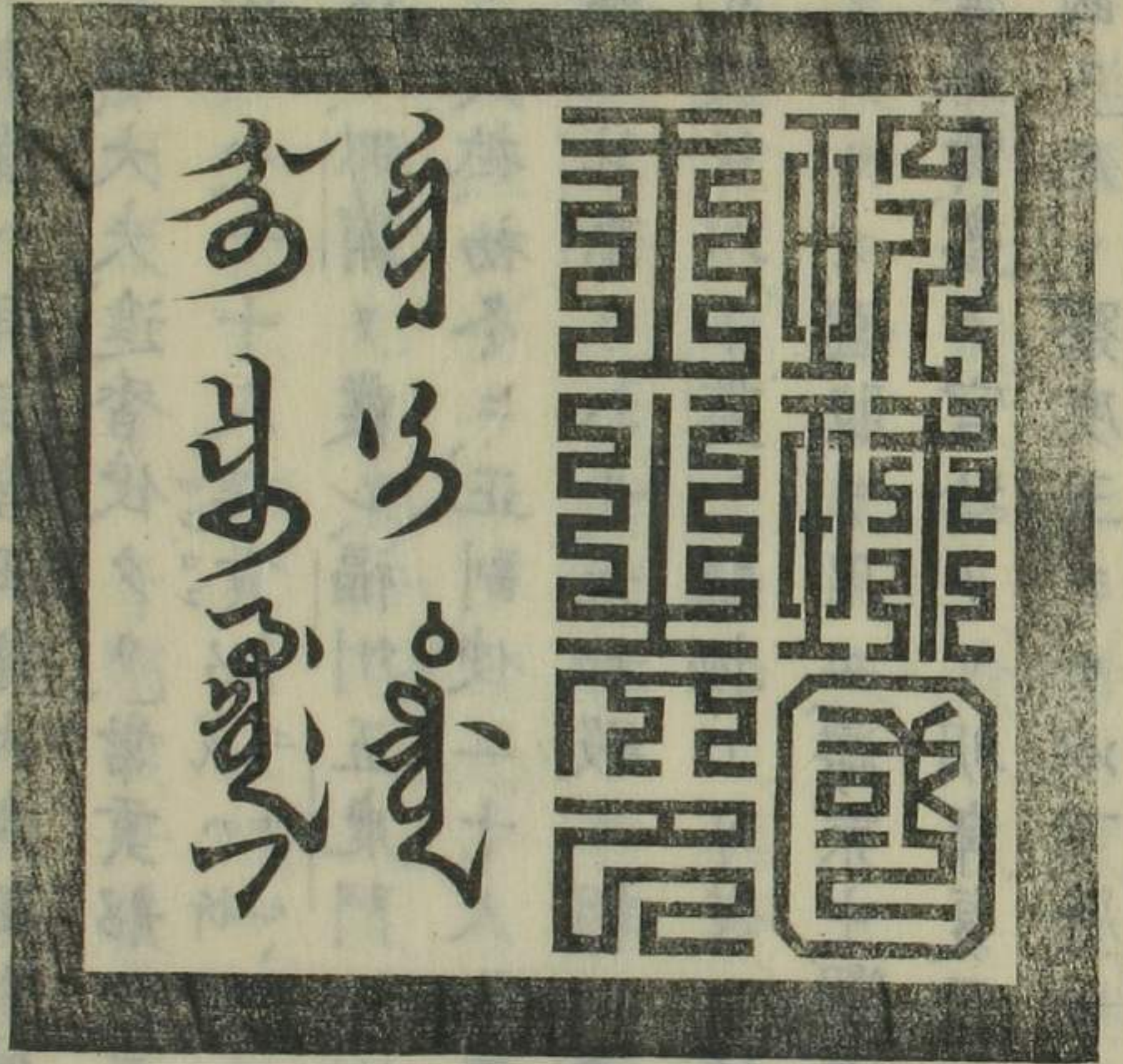
使臣等謹テ詔命ノ辱ヲ拜ス、次ニ皇上、皇后ヨリ、王、王妃ニ錦、天鷲絨、博多織、敷物、花瓶、銃、鞍、鞆等ノ賜物アリ、更ニ三使ニ錦、綾、陶器、新貨幣等ヲ賜フ、其餘從行ノ者皆恩賜アリ、別ニ琉球藩ヘ新貨幣三万圓ヲ賜フ、使臣等滯京中、外務省ニ入費一万圓ヲ給シ、敕任官ノ格ヲ賜ヒ、鐵道開業ノ行幸、及ビ吹上御苑和歌御會等ニ侍ル、又琉球ノ諸外國ト結ベル條約ハ、盡ク外務省ニ管シ、同省及ビ大藏省ノ官員、琉球在勤ヲ命ゼラル、廿九日、琉球藩王尚泰ニ、一等官ノ格ヲ賜ヒ、又府下飯田町ニ第宅ヲ賜フ、十月始、使臣等歸國ス、

今藩ト為セ、尚鹿見島縣ニ依テ事ヲ通シ、大抵其縣吏ヲ外務省ノ官員トシテ在留セシメ、東京ニ來ルハ外務省直ニ之ヲ管ス、

唐土ノ封貢ハ、隋煬帝始メテ流求國ヲ攻ム、從ハズ古推ノ朝ニ當ル、唐五代宋ヲ歷テ通ゼズ、元世祖成宗共ニ琉球ヲ攻ム、亦從ハズ、北條時宗貞時ノ頃ニ當ル、明太祖琉球ヲ招撫ス、中山王察度乃チ使ヲ遣ハシ、方物ヲ献ズ、太祖仍テ中山王ニ封ズ、是唐土ニ聘スルノ始ニテ、實ニ洪武五年ナリ、南朝、文中元年ニ當ル、爾來、山南王、山北王亦繼テ聘ス、太祖共ニ之ヲ封ジ、三王ニ各冠服及ビ駝紐鍍金銀印ヲ給ス、山南山北滅スル後、中山獨リ聘礼絶エズ、始メ一年一貢、後二年一貢、人員一二百人、正副使以下一二十人、京ニ赴クト定ム、後我朝鮮ノ役、及慶長征伐ノ時、僅ニ絶エ、洪武ノ貢物ハ、馬、刀、金、銀、酒、金、銀、粉、匣、瑪瑙、象牙、螺

殼泥金扇、紅銅錫、復布、牛皮檀香、黃熟香、蘇木、烏木、胡椒、硫黃、磨石等、爾後多クハ馬、硫黃ナリ、賜物ハ、大抵、衣冠、綾羅、綢緞、幣、曆、錢等ナリ、明滅スル後、更ニ前印ヲ繳シ、清ニ聘ス、清主乃チ鍍金銀印ヲ給シ、封冊ス、後相繼テ亦聘貢絶エズ、始ハ、金銀匣、盃、圍屏、扇、蕉布、麻布、胡椒、蘇木、刀、鎗、甲冑、鞍、繚、綿、螺盤等ヲ貢ス、後ハ、硫黃一万二千六百斤、螺殼三千斤、紅銅三千斤、錫千斤ト定ム、賜物ハ大抵、綾羅、錦、繡等ナリ、明ノ時、三王並ビ封カルニ因リ、中山王ノ號ヲ以テ分別ス、後三山ヲ一統スト、雖氏冊封印、璽共ニ琉球國中山王ト稱ス、清ニ至テハ、印文ハ、只琉球國王之印トシ、冊封書ニ中山王トス、明ニ在テ

琉球國王之印



右ハ篆、左ハ滿字、大サ圖ノ如シ、

ハ、正二品、皇子親王ヲ降ル一、一等弁冠、蟒服、白玉犀帶ナリ、清ニ在テハ、品位ヲ定メズ、衣冠旧ニ依リ、列ハ朝鮮ノ下、安南、緬甸ノ上ニ在リ、二年ニ一貢シ、其間年ニ



接貢アリ、臣ナシ、使謝恩慶賀ニ、法司官、紫金大夫、正副使タリ、常貢ハ、耳目官、正議大夫、正副使タリ、清主殂スレバ、正議大夫、進香使タリ、常貢船ハ二艘、第一ハ、百二十人、第二ハ、七十人、接貢船或ハ折貢ニ作ル、ハ、一艘、百人許ナリ、貢使ハ、那覇ヲ發シ、福州五虎門ノ川ニ溯リ、琉球館ニ入ル、大抵、初冬ニ、正副使二十人許、幾程シ、轎馬、舟車四十餘日、北京ニ入り、大和殿ニ朝シ、清帝ニ謁シ、貢獻ス、王妃使臣以下盡ク賜物アリ、使臣、清主ニ謁スルニ、明服ヲ許サズ、國服ヲ用ユ、滯京中、饗宴豊美ヲ盡ス、凡ソ旅舎路費、盡ク官給ナリ、明年復至ノ頃、接貢船ニ乗テ歸國ス、凡ソ察度王ヨリ以下、歷世、明清ノ冊封ヲ受

ケザル者、僅ニ数王ノミ、冊封使ハ、明ニ在テハ、大抵給事中、正使、行人、副使タリ、清ニ在テハ、正使ハ、必滿人、副使ハ、漢人、共ニ翰林院ノ文臣タリ、冊封ノ礼ハ、國王新ニ位ヲ嗣ケバ、中山王世子ト稱シ、冊封ヲ請フ、清主乃チ正副使ヲ命ジ、儀衛服飾ヲ嚴重ニシ、福州ヨリ發シ、那覇ニ上陸シ、世子以下、迎恩亭ニ迎ヘ、滯留中、那覇ノ天使館ニ置ク、先ツ真和志ノ先王廟ニ、前王ヲ論祭シ、唯論祭ノミ、故ニ歷代謚ナシ、次ニ首里ノ王城ニ、冊封ノ礼ヲ行フ、世子以下、皆明服ヲ用ユ、音樂儀典、嚴肅ナリ、其餘滯留中、舞樂宴饗、甚タ厚シ、冊封使ハ、大抵、復至後ノ南風ニ發シ、南路ヲ取り、冬至後ノ東北風ニ還リ、北路ヲ取ル、然

レ氏、海上風潮ノ險多ク、加之、唐船脆弱ナレバ、毎ニ風浪ノ難ニ逢フ、琉球冊封使ノ命ニ當ル者ハ、皆死ヲ以テ期待スト云、

國體

琉球國、上古我内附ノ國タリ、中古聲息相絶工、足利氏ノ始ヨリ、明ニ聘シ、復我ニ属シ、遂ニ兩属ノ國トナル、慶長以後、全ク島津氏ニ陪属シ、尚明ニ聘シテ止マズ、徳川氏、島津氏措テ制セズ、剩ヘ其國ニ托シ、貿易ヲ明ニ求ムルニ至ル、其國威名義ニ於テ、大ニ立タザル所アリ、且其遇待、既ニ陪属タレ氏、又外國ノ體アリ、其國モ亦我ニ朝スレバ、我正朔ヲ奉ジ、彼ニ聘スレバ、彼年

號ヲ用ユ、朝鮮、我ニ聘スル如キハ、唯支干ヲ書シ、國中ハ、彼年号ヲ用ユ、且我ニ向テ、

彼事ヲ秘セズ、彼ニ向ヘバ、甚シク我事ヲ秘シ、絶エテ

日本アルヲ知ラズトス、内地ノ船、琉球ニ在テ、唐船ニ逢ヘバ、必ス避匿スルヲ定メ

トスト、且國中及ビ諸外國ノ交際ニ、皆彼正朔ヲ用キ、

清國藩屏獨立國ト稱セリ、其情實ヲ察スレバ、一ハ我

陪臣ノ名ニ恥ヂ、彼藩屏獨立國ノ名ニ艶矜シ、一ハ國

貧小ナレバ、依テ交易ノ利ヲ得テ、國用ニ足スガ為メ

ノミ、既ニ之ヲ失ハニテ恐ルレバ、之ヲ慎マザルベカ

ラズ、亦憐ムベシ、當初島津氏ノ制セザルモ、亦慈下利

トニ出ツル者カ、然レ氏、彼ハ唯一年一貢、我ハ往來織

ルガ如シ、其生計ヲ依頼スルハ、偏ニ我ニ在ルノミ、然

此時外國交際ノ始ニシテ其情尚料ラズ故ニ咸豊ノ號ヲ用キシト云ハ蓋シ島津氏深意アリ所ト云  
 曰來薩摩ヨリ負債莫大ニシテ年々空シク其返辨ニ奔勞セシニ一新以來盡ク之ヲ消却ス國人同ヲ撲直ト云  
 大天朝恩威泣去歲冊封ノ識ノ如キ事速ニ辨セリト云

琉球新誌 卷下  
 琉ニ、安政元年、ペルリ獨立國體ヲ以テ、條約ヲ結バン  
 ト言ヒシ片、國人、清ニ對シ、臣義ヲ失フトテ、一旦之ヲ  
 拒ミ、後竟ニ條約調印セル片、咸豊ノ年、號ヲ用キタリ、  
 因テ西洋各國、亦大ニ疑ヲ起セリ、抑萬國ノ通義ニ爲  
 ザ一國、兩國ニ屬スルノ理アラシヤ、今ヤ皇上政ヲ親  
 ラシ、名義ヲ正シ、國威ヲ明ニシ、藩王ニ叙シ、幣帛ヲ賜  
 ヒ、優待撫恤、以テ上世南島ノ故地ヲシテ、再ビ全ク皇  
 化版圖ニ復セシム、其國ノ如キモ、亦漸ク皇恩ニ浴シ、  
 同氣ノ國ニ附服シ、遂ニ外國ノ封ヲ甘ニゼザルニ至  
 ラシ、今ペルリ琉球記行中ヨリ、衆論ヲ畧文摘譯シ、陳  
 腐ヲ憚ラズ、左ニ擧グ、

爰ニ琉球ノ所屬ニ就テ、疑案アリ、或云、日本薩摩公  
 ニ屬ス、或云、支那ニ屬スト、然レモ、衆論歸スル所ハ、  
 其國自ラ獨立ノ體アリテ、全ク日本ニ屬シ、又支那  
 ニ、名目ヲ以テ、臣屬スル者トス、其毎年支那ニ送レ  
 ル貢租ハ、定則ノ如ク見ユレモ、琉球ノ官吏ハ、支那  
 人ナラズ、又漢文漢語ヲ解スル者アリト雖モ、通用  
 ノ言語ハ自ラ別ナリ、然ルニ、那覇ノ一官吏嘗テペ  
 ルリニ詔ルニ曰、明朝以來、我國支那外藩ノ一國ニ  
 列スルヲ得シ、我國ノ大ニ榮誇スル所ナリ、支那  
 帝、多年我王ニ官爵ヲ賜フ、我國モ亦方物ヲ拮据シ  
 テ之ニ奉ゼリ、我國人支那ニ往テ、絹、綢、精藥、其他國

萬國公法、國  
 其保護、在  
 所屬、ベルリ  
 論、此ノ如ク、余  
 モ亦既ニ之ヲ序  
 論ニ載スルベシ  
 時ニ薩州ヲ大  
 ニ武備共卒ニ送  
 リシ、云清國ニ  
 嘗テ此事ナク、國  
 人モ亦之ヲ頼ミ、  
 是我屬國ノ證  
 確乎タルモノナリ

用ノ諸物ト交易シ、尚足ラザル中ハ、土噶喇島ニ至  
 リ、一ノ近親國ト交易セリ云々ト、此近親國トハ、日  
 本ヲ諷言セルナリ、然レモ、其交易ハ、日本船ヲ用キ  
 多ク日本ト行ヒ、日本ヨリモ、毎年凡四百五十噸積  
 位ノ船、三四十艘モ、送り来レリ、然ルニ琉球ヨリハ、  
 僅ニ毎年一二艘ノ船ヲ支那ニ送ルノミニテ、支那  
 船ハ一艘モ那覇ニ入レシメズ、且危難アレバ、只日  
 本ニ依頼シ、支那ニ恃マホルガ如シ、且琉球ニテ、日  
 本人ヲ見ルノ許多ニシテ、皆土人ト隔意ナク婚姻  
 交通シ、實ニ其本國ニ居ルガ如ク、且守兵モ未テ那  
 覇ニ屯營セリ、然ルニ、支那人来レバ、諸外國人ト一

様ニ看做セリ、况其人種言語、風俗徳悪、先能ク日本  
 属縁ノ國タルヲ證シ、就中、其骨格言語、酷ニ相類  
 セリ、上世日本ヨリ殖民セルヲ疑ナシ、然レモ、其開  
 化文学ノ一半ハ、大ニ支那ノ浴化ニ因リ、且毎年貢  
 物ヲ送り、支那帝モ亦新王嗣立ノ時ハ、特任使節ヲ  
 送り、王號ヲ與ヘ、自ラ獨立國ノ體ヲ成セリ、然レモ、  
 到底、實着上ニモ、政法上ニモ、琉球ハ、百事日本ノ属  
 國ナルヲ疑ナク、更ニ其實ヲ言ヘバ、日本薩摩公ニ  
 臣属スル者ナリ、云々、  
 琉球記行曰、日本琉球、兩人種ハ、甚ダ相類セリ、兩種共

琉球記行曰、日本琉球、兩人種ハ、甚ダ相類セリ、兩種共

ニ、身丈同ク、骨格好クシテ強壯ニ、色暗赭ニテ、間魁偉  
 秀美ノ者アリ、頭骨楕圓、深目長鼻、歐羅巴人種ニ似タ  
 リ、前頂ノ骨圓ク、面亦楕圓ニテ、額高ク、面容柔和愛ス  
 ベシ、東方人種ノ方面ナルハ、頬骨高キニ因レ、兩種  
 共ニ甚タ高カラズ、眼ハ大ニシテ氣采アリ、濃眉弓形  
 ナ成シ、鼻形能ク適シ、支那無耒人ノ如ク低カラズ、孔  
 モ大ナラズ、口稍大ニ、齒廣シ、婦人モ骨格恰モ好ク、細  
 腰纖頸、胸大ニ開ケ、身稍短小ニ、面モ稍方形ニテ、鼻モ  
 低シ、間美艷ナルアリ、因テ考フレバ、琉球元耒日本ト  
 同人種ニテ、太古ノ世ニ、日本ヨリ殖民シ、後漂流等ノ  
 事ニ因リ、支那臺灣無耒人等モ少シク加ハリ、現今人

種ト混成セシナルベシ、凡日本琉球人種ノ支那無耒  
 人種ニ異ナルハ、鬚髯ノ多ク剛ク黒キニ在リ、支那無  
 耒ニ大抵此事ナシ云々、○性質ハ、飲々トシテ情アリ、  
 順良ニシテ少シク冷風アレ、沈重度量アリテ、頗ル  
 智敏ナリ、然レ、海島ニ僻在シ、外國ト交ル少キニ因  
 リ、質朴ヲ存シ、名利勞心ノ欲少ク、優寛天然ニ安ンジ、  
 天壽ヲ致ス者多シト云、婦人モ、行儀柔和ニ、男女共ニ、  
 勞苦飢寒ニ堪工、日夜勞作シテ息セズ、然レ、如何セ  
 シ、天質美ナルモ、政治ノ弊カ、欺罔惡詐モ亦間アリ、古  
 ハ血氣ニシテ、不平ニハ鬪殺割腹ノ風アリシト云、今  
 ハ人氣殊ニ平穩ニ、絶エテ争鬪無シ、五六十年前ニ英

人ハシルルホールナル者嘗テ東洋ニ来リ、琉球ノ國風ヲ探リ、國人古来ヨリ絶エテ戦争ナル物ヲ知ラズト傳聞シ、後セイイントヘレナ島ヲ歴テ、那勃列翁ニ會シ、談、偶、其事ニ及ビシカバ、那勃列翁ハ、其特奇ナル天稟ヲ聞クニ及ンデ、驚然肩ヲ脅カシ、戦争絶エテ無シト歎、是レ決シテ能ハザルヲナリト語りシトゾ、彼ノ戦ヲ好メル大武將ノ心ニ在テハ、左モアルベシ、然レ氏古ヘ國內分裂シ、古城ノ遺蹟モ、今尚存スレバ、争乱ノ禍モ亦時トシテ免レザルヲアリ、而シテ此湫乎タル一島中ニ、分裂攻戦セシヲ見レバ、其人性ノ優悠小量ナル、亦量リ知ルベシ、○言語ハ皆内地ト小異アルノ

ミ、然レ氏「テニヲ」ト土音ハ、異ナルアリテ、會話明ニ通ジ難シ、琉球ヲ「ト」ト云ヒ、首里泊ヲ「ト」トマイト云フ、皆訛音ナリ、総テ良行ノ音ヲ誤レルハ、薩人モ亦然リ、古ヘ隼人ノ同人種ナルヲ知ルベシ、然レ氏其稱呼ニ内地ノ古言存スル者、却テ多ク、内地ヲ「ヤマ」ト稱シ、甚タ尊崇ス内地ノ人ヲ日本人ト稱シ、琉球人ハ、自ラ沖繩人ト稱ス、其方言一二ヲ左ニ掲ク

水	茶	火	星	風	鶏	卵	海	眼
手	鼻	口	木	米	甘薯	鍋	酒	烟草
鐵	鉢	鏡	書物	椅子	石	豚	飯	男
父	母	兄	弟	庖丁	衣服	名	百姓	春
								色
								神

佛 フツ 薩吏 サツシ 毒蛇 ドクヘビ 妻 ウメ 媚子 メコ 美娘 ミナガ  
 尋常會話ノ末語ニ、デアベルト言フ、是レ、古言ニ、デア  
 リハベルトイヘルノ、畧言ナリト云ス、

政制

政體ハ、立君特裁ニテ、血系ヲ以テ相嗣ギ、政權ハ、執政  
 ノ手ニ在リ、貴族士族等皆世祿ノ制ニテ官吏ハ皆其  
 門家ヨリ登用ス、然レモ、土着ナラズ皆首里那覇等ニ  
 聚居ス、各村及ヒ各島ノ里長ハ、庶民ヨリ擧ゲ、官吏ヲ  
 遣ハシ制治シ、首里ノ政府、其總制ヲ統ズ、位ハ一品ヨ  
 リ九品ニ至ル、各正從アリテ、十八等トス、官服ハ明制  
 ニテ、帕、簪、袍、帶ノ色製ヲ以テ、等級ヲ別ツ、官ニ國官、唐

官ノ二様アレモ、職務ハ相合ス、蓋シ、國官ハ古来ノ遺  
 官ハ、唐山ニ倣ヒシ者ナルベシ、

國官	唐官	加銜ハ格ナリ 座ハ見習ナリ	王子	正一品	國相	左相一員 右相一員	紫綾五 色花	金	紅	錦花	王子、按司、 才徳アル者 之ニ任ス
按司	從一品	法司官 除授刑法一員 錢穀出入一員 禮儀圖籍一員	親方	正二品	紫金大夫	同	同	同	深青	黃地 龍蟠	又三司官 ト称ス
親	從二品	紫金大夫	親方	從二品	紫金大夫	同	同	同	同	同	紫帕ヲ被ム ルニ因又紫 巾官ト称ス
雲	正三品	耳目官 司寘司賞、 司刑、司礼、 各員	上	正三品	耳目官	同	同	同	同	同	皆謁者、又ハ 申口衆ト称 ス

琉球新誌 卷下 十四





賜ヒ、某地何官ト稱ス、野之子ハ、世祿ノ士家ニ、里之子  
 家ハ稱スル者アリテ、其子孫之ニ任ジ、終ニ親雲上ヨ  
 リ親方ニ昇ル、里之子ハ野ノ訛ナリ、士筑登之ハ筑  
 登之家ト稱スル者世祿ナノ子弟之ニ任ジ、親雲上ニ  
 昇リ止ム、別ニ仁也家ト稱スル者アリ、畧、平民ニ同ジ、  
 亦筑登之ヨリ親雲上ニ昇ル、筑登之仁也、又久米村  
 閩人三十六姓ノ後裔、今僅ニ七百餘家アリ、皆唐土ニ  
 留学シ、通事ヨリ紫金大夫ニ昇リ、文筆應答ヲ司ル、○  
 法司官ハ、分職アリト雖、毎事必ス三人議定シ、國相  
 ニ稟ス、國王ハ成ヲ受クルノミ、首里ノ尚向翁毛馬夏  
 等ノ七姓之ニ任ズ、向翁毛馬ヲ常ニ王妃ニ納ルトス、耳

目官ノ司實ヲ或ハ御鎖側ト稱シ、司寶ヲ或ハ御双紙  
 庫裡、司刑ヲ或ハ平等側、司礼ヲ或ハ泊地頭ト稱ス、○  
 凡ソ閩祿アル者ハ、皆首里那霸久米泊ニ聚居シ、此四  
 所ノ人ノミ官吏ニ任ジ、餘ハ總テ民戸ニテ、畧假字ヲ  
 知ル者ヲ村吏トス、皆昇進セズ、三省、各島ハ、村吏ノ長  
 地頭ト稱スル者、銀簪ヲ許スノミ、餘ハ皆銅簪、藍袍、定  
 マラズ、三省ノ各間切ハ、各吏二員ヲ遣ハシ、各島ハ、大  
 小ニ隨ヒ、監撫ノ吏、奉行官三員、二員、或ハ一員ヲ遣ハ  
 シ、之ヲ治メシメ、毎年ニ交替ス、○祿秩ニ、三様アリ、一  
 ハ、俸米ニテ、時ヲ定メ給ス、世祿ナリ、二ハ、采地ニテ、子  
 孫次第ニ減ジ、曾孫ニ至レバ減セズ、永ク世祿トス、三

ハ、切米ト云功アレハ給ス、其身一世トスルアリ、定限  
 数年、或ハ数世トスルアリ、又永世トスルアリ、○曆ハ、  
 通事官預メ萬年書ニ據リ、推算曆ヲ製用シ、清ニ到リ  
 例年ニ清曆一百冊ヲ齎還リ、倣テ國中ニ頒與ス、○里  
 法ハ、三十六町里法ヲ用ユ、○元旦、上元、及冬至ニ祝賀  
 アリ、國王ノ誕日ニ、大賀儀アリ、叙任大赦ヲ行フ、其他  
 宗廟社稷等ノ祭祀儀典ノ制畧備ル、○武備甚々薄シ  
 大抵文官、武職ヲ兼ヌ、兵制ハ、兵ヲ農ニ寓シ、五家ヲ伍  
 トシ、五伍相統ブ、親雲上筑登之ト稱スル者、皆武ニ習  
 ヒ、事アレバ出テ戰フ、兵器ハ、甲冑、矛、及弓、矢、鎗、砲等ナ  
 リ、多ク、舟艦水戰ノ用ニ備フ、國內ニ、王城ノ外、城砦ナ

シ、那覇ニ、演武場及ビ砲臺ヲ備フ、○刑法ハ、死刑、三ツ  
 剉斬、斬首、磔ナリ、輕刑、五ツ、流、曝日、夾、枷、笞ナリ、罪ヲ犯  
 ス者アレハ、大夫ヨリ法司ニ達シ、法司曲直ヲ決シ、遲  
 留セズ、裁判ノ法、極メテ嚴ニ、顯官モ憚ラズ、父子兄弟  
 モ情ヲ曲ゲズト云、

國計

中部南部諸島ノ歲入ハ、九万四千二百三十石トス、  
二、中部諸島ヲ、七万一千七百八十七石、南部諸島  
 諸島ヲ、一万九千〇九十六石八斗餘トス、北部諸島  
 ハ、五万二千八百〇四石トス、旧記ニ、三万二千八百  
 田制ニ三様アリ、一ハ、王府ノ公田ナリ、二ハ、各官ノ采  
 地ナリ、三ハ、民間ノ私田ニテ、賣買ヲ許ス、然レモ、價甚

琉球、薩摩、  
納ル、毎年ノ貢  
米、僅ニ千石ニ  
足ラズ、却テ  
薩摩、三萬石  
宛、毎年送リシ  
ト云、  
從來、其國貧小  
シ、巴、得、大  
薩、借、ル、薩  
高利ヲ以テ之ヲ  
借、積年ノ元  
利、莫大ト為、年  
々、產物、賣、大  
抵、其返償ニ没  
入セ、難、新以  
來、元利共之ヲ  
消却セ、三因、  
大ニ恩、感、ス、  
ト云、

夕貴シ、各属島ハ、公田私田ノミ、監吏、租税ヲ徴シ、王府  
ニ送ル、年租ハ、大抵十分ノ六分ハ正租、二分ハ雜税、二  
分僅ニ農民ニ入ルト云、又人毎ニ、役二日アリ、事アレ  
ハ皆役ス、○慶長成功ノ時、幕府、琉球ノ半、十萬石ヲ、島  
津氏ニ賜フト云、北部諸島ノ琉球記行ニ、薩摩公ハ、毎  
年琉球ヨリ、大凡九十萬弗ドルヲ受クトアリ、是訛聞ナル  
ベシ、試ニ十萬石ニ九十萬弗ドルヲ當ツレバ、一石九弗ニ  
當ル、其算過當ト云フベシ、然レ、其餘、雜税交易ノ利  
モアリトスレバ、或ハ然ランカ、世俗ニ薩摩ノ國用ハ、  
半ハ琉球ニアリシト  
云、○明治三年ノ改計ニ、中部南部諸島ノ户数、四萬三  
千四百九十九戸、同人口、二十三萬四千三百六十九人、

内地輸入品ハ、  
水産、茶、烟草、紙、  
器、類、最多ト  
ス、

男、十三萬六千八百八十一人、北部諸島ノ戸口詳ナラズ  
女、九萬八千八百八十八人、  
○古來ヨリ、國ニ金銀ナク、唯錢ヲ用ユ、明朝、錢ヲ給セ  
テ、給、今通用スルハ、皆寛永通寶ナリ、世ニ文、錢ト稱、至  
セズ、  
ニ内地ノ銀ギン王タマヲ通用ス、又清ノ冊封使、滯留中ノミ、別  
ニ小錢ヲ鑄ル、鉛ナラズ、鐵ナラズ、輪郭文字ナク、草繩  
ヲ貫キ、固封シテ用ユト云、明治五年、天朝、金銀紙幣三  
萬圓ヲ賜フ、使臣、又別ニ自ラ乞ヒ、換ヘ得テ齎還レリ  
ト云、○國貧小ニシテ、交易ノ利ヲ以テ、大ニ國用ヲ助  
ク、年々船舶ヲ以テ、薩摩ト互ニ相往來交易シ、貨幣ヲ  
用キズ、品物相交フ、旧來琉球ノ產物ハ、唯薩摩ヲ限り、  
他ノ内地ノ人ト、交易スルヲ禁ゼシカ、今年三月、令

畢竟内地、清國ノ品物ヲ彼此販賣スルモノテ生業トセリ

琉球ノ國計ハ泡盛、サマシ、芭蕉布、四産物、ス、塩豚、之ニ次グ砂糖ハ特ニ島ノ産トス

琉球新誌

琉球新誌

アリテ其禁ヲ許セリ、清國へモ、一艘二艘、隔年ニ朝貢ニ托シ貿易ス、此利モ亦大ニシテ、明清以來、朝貢絶エザルハ、其實此故ト云、清國ノ交易ハ、只船數ヲ限り、銀額ヲ限ラズ、全貢ハ、十餘萬銀、接貢ハ、五六萬銀ナリ、小船多載スル能ハズ、大船ナレバ、福州港淺ク、船入ル能ハズ、買フ所ノ唐物ハ、絲、綢、綾、緞、紙、藥、金、銀等ナリ、昔ハ暹羅、滿刺加、伏哇國等ト交易セリ、國ノ輸出品ハ、砂糖、泡盛、芭蕉布、綿布、上布、紬、紙、硫黃、草蓆、塩豚、漆、罌等ナリ、  
農工  
沖繩全島ヲ百六十方里トシ、其八分ノ一、二十方里、即チ二十五方餘及ヲ田畝トス、此中、十四方及ヲ甘薯ト

シ、八千及ヲ蔗トス、米ハ凡ソ三万六千石、麥ハ九千石トス、各現石ノ其他雜穀、芋、菜等、數千万及アリ、大抵穀ハ一反ニ一石程生ズ、土人最能ク耕種ニ努ム、山上ハ半腹断崖ニ至ルマデ皆開墾ス、器械耒鋤ノ類皆内地ヨリ渡ル、自國ノ製、殊ニ鈍ナリ、其他耕耘作田、水樋或ハ牛馬ヲ使用スル法、大抵内地ト同ジ、小河、灣、江ハ塩氣アリ、用水ニナラズ、故ニ高田ハ雨水ヲ湛ヘ、下田ハ次第ニ低クシ、泉水ヲ溉グ、中山、山北水田多シ、地質稻ニ宜シ、山南陸田多シ、地豆、麥ニ宜シ、或ハ收稻ノ後、又麥、芋、薯ヲ植エ、一年再收スルモアリ、大抵秋耕シ、冬種エ、春耕リ、夏收ム、終年温暖ナレハ、兩熟スベキ理ナレ

琉球新誌

十九

因兩載版

氏例年六月後ハ、大颶屢起リ、海雨横飛シ、稻菓皆其害  
 ヲ受クルガ故ナリ、○砂糖ハ、小蔗草ヲ碾キ、汁ヲ熬リ  
 製ス、黑白、冰糖アリ、首里ニ多ク、北部諸島最多シ、國  
 内ハ貴人ノ食トシ、又交易品トス、烟草ハ、葉細ク長シ、  
 各地ニ製セ、上下皆嗜ムニ因テ足ラズ、多ク大隅ヨ  
 リ輸入ス、塩ハ、潮水ヲ曝シ製ス、色白シ、宜野灣今歸仁  
 那覇ニ製塩場アリ、又塩豚ノ製出、頗ル多シ、茶ハ少シ、  
 土質茶ニ宜シカラズト云、殊ニ内地ノ茶ヲ珍惜シ、又  
 多ク清ヨリ来ル、漆器ハ、匣盃皿等、朱漆ヲ上品トス、女  
 製シ、男画シ、泡盛ハ先ヅ、純白米ヲ糊ト為シ、適宜ノ水  
 ヲ加ヘ、手ニテ、頻ニ舂ク揉ミ和シ、之ヲ蒸溜シテ、圓長

泡盛ヲ製ス家  
 唯首里ニ四戸  
 ノミ、負小國一  
 二名産ノ法也、  
 漏シテラ憂ヘ、  
 從來之ヲ嚴秘  
 セ、前薩摩持  
 旨ヲ以テ之ヲ國  
 王ヨリ傳ヘタリト  
 云、蓋シ白米用  
 キルト、手ニテ揉  
 ヲ、壺ヲ轉シテ、  
 氣ヲ出テ、持妙  
 ノ法トシ、然レ薩  
 人微ニ前秋ニ風  
 土ノ異ルカ、竟其  
 芳烈ニ及バズト云

陶壺ニ密封シ、床下ニ置キ、又屢頻ニ其壺ヲ轉シ、儲  
 ル、數年ノ後、用ユ、味極メテ芳烈ナリ、相傳フ、昔シ、外  
 國人来テ曰、國、南海瘴霧中ニ居ル、人必ス夭死セント、  
 因テ毒ヲ避クルノ方ヲ授ク、即チ泡盛ナリト、薩人酒  
 ヲ嗜マザル者、琉球ニ成スレバ、多ク泡盛ヲ飲ミ、醉ハ  
 ズ、大島ニ歸ル頃ハ、數杯ニ堪エズ、竟ニ國ニ歸レハ、故  
 如ク一杯ニ堪エ、スト云、又布帛ノ類、盛夏ニ微ヲ生  
 ズ、泡盛ヲ以テ晒セバ、色即チ鮮明ナリト云、泡盛ノ輸  
 出、頗多シ、又燒酎、清濁酒、醋、醬油、味噌ノ製、内地ニ同ジ、  
 紅酒ハ、南部諸島ヨリ出ヅ、絹ハ、甚ダ少シ、但、姑米島多  
 ク養蠶ス、絲粗黒ナリ、紬布ヲ織出ス、業ヲ織機ハ、婦人

製内地又唐山ノ絹絲ヲ以テ織ル、皆綿或ハ無地ナリ  
 世ニ琉球紬ト稱シ緊且美ナリ綿布ハ世ニ薩摩ガス  
 リト唱ヘ、薩人ハ琉球綿ト稱ス、其製ハ、添メテ唯屢能  
 ク叩ク、故ニ屢洗フテ色變ゼズ、木綿ハ、沖繩姑米綿姑米  
 フ云惠平屋、及ビ南部諸島ニ産バレ、極ノテ少シ、皆内  
 地ヨリ輸入スル者トス、麻布ハ細上布ト稱シ、世ニ薩  
 摩上布ト唱フ、生麻ヲ治メテ織ル、最貴シ、綿布麻布共  
 ニ山藍ヲ以テ添ム、南部諸島ノ産ヲ先島織ト稱シ、殊  
 ニ上品ナリ、芭蕉布ハ、芭蕉成長凡ソ三年ノ者ヲ伐リ、  
 之ヲ煮テ、五六月間、流水中ニ浸シ、後其皮内ノ絲ヲ縷  
 シテ織ル、最モ織巧テ極ム、首里ノ産ヲ上品トシ、多ク

琉球表ハ北部諸島最多シ

輸出ス、草蓆ハ、薊草ヲ以テ編ム、姑米及ビ南部諸島ニ  
 出ヅ、精細ナル者アリ、人家皆蓆席トス、世ニ琉球ト稱  
 スル疊表タ、ミオモテ是ナリ、交易品トス、紙ハ、穀樹皮ニテ製ス、数  
 種アリ、棉紙、清紙等ノ稱アリ、護壽紙、最佳ナリ、油ハ、魚  
 油アリ、魚脂ヨリ製ス、燈油ハ、油樹ノ實ヨリ製ス、桐油  
 以テ、蠟ハ、姑米島ニ出ヅ、燭ハ、色微黒ナリ、鎔ケテ衣紙  
 ニ滴ル片ハ、凝ルヲ待テ、剔リ去ルニ、油痕ナシト云

文教

上世ニ文字ナシ、俗傳フ、昔シ、天人、中城ノ地ニ降り、文  
 字ヲ授ク、體、古篆ノ如ク、今尚百餘字ヲ餘シ、吉凶ヲ占  
 フニ、驗アリト云、俗ニ天人ト云フハ、皆外國人ナリ、案

代ノ人、来リ傳フル者カ、中古舜天王我國字ヲ傳ヘシヨ  
 リ、國中普ク平假字片假字ヲ用キテ、國音ヲ綴レリ、始  
 テ明ニ通ゼシ片、木簡ヲ革繼又、文章ニ、漢字假字ヲ雜  
 シ、假字ヲ刻シ送リシト云、用シ、及ビ贈答書翰ノ文、或ハ鈎挑旁記ヲ以テ、漢文ヲ  
 逆讀スル如キ、皆内地ト同シ、假字付板本漢書類、内地  
 ヨリ渡ル、唯久米村、閩人ノ裔、古法帖ヲ習ヒ、漢書ヲ音  
 讀ス、明ノ洪武中、始メテ留学生ヲ明ニ遣ハセシヨリ、  
 清ヲ歷テ、今ニ至ルマデ、例年絶エズ、首里那霸久米ニ  
 学校アリ、王親以下、各官ノ子弟、皆入テ孔孟ノ学ヲ講  
 シ、漢字ヲ解シ、古經書ヲ讀ム、久米ノ学校、学制畧備ハ  
 ル、聖廟アリ、孔子四聖ヲ祀ル、庶人ノ子弟ハ、寺ヲ塾ト

シ、僧ヲ師トシ、實語教式、目庭訓等ヲ学ブ、書ハ大槓、王  
 置寺ノ流行ハレ、又一般ニ皇学ヲ務メ、最和歌ニ長シ、  
 書モ亦優美ナリ、画ハ皇漢相半シ、自ラ一風アリ、医ハ  
 薩摩或ハ清國ニ学ブ、兩國ノ学ヲ歷ガレバ、治術ヲ施  
 スヲ禁ズ、又ト筮師アリ、○國中ニ伊勢太神、八幡、天神  
 熊野神等ノ社多シ、辨岳ニ天孫氏ノ女ヲ祀ル、又君真  
 物ト云ヘル神ヲ崇奉ス、其他、天地山川ノ神ヲ祀ルニ、  
 皆石ヲ以テ神體トセリ、天妃宮トハ、宋ノ乾隆年間ニ  
 生レシ林氏ノ女ニシテ、海上ニ靈アリトシ、歷代ノ冊  
 封使、徒シテ此ニ祀リ、風浪ヲ鎮スル者ニテ、船王神ノ  
 類ナリ、佛法ハ、臨濟真言ノ二宗ノミ、寺院頗ル多ク、僧

徒ノ崇奉モ亦厚シ、僧徒ノ唐土ニ入ルハ、清國ヨリ禁  
 止、皆薩摩ニ留学ス、故ニ善ク皇語ヲ解ス、享保以前ハ、  
 琉球僧内地諸州ヲ行脚セシガ、後國禁ト為リ、薩摩封  
 内ノミヲ經過スト云、嘉永年間、英國耶蘇宗徒等、一僧  
 へ、テルヘームナル者ヲ遣ハシ、那覇ニ在留セシメ、其  
 法ヲ説カシメシニ政府之ヲ欲セズ、國人モ亦強ヒテ  
 拒マズト雖、竟ニ入ル者ナク、数年ニシテ去レリト  
 云、

風俗

國人、名利勞心ノ累ナク、民間有餘不足ニ安ンジ、群集  
 遊戯少ク、貧ナレ、凶、險樸ニシテ、盜セズ、又能ク法ヲ畏

レ、日夜ニ勞作怠ラズ、殊ニ耕漁ヲ務ム、相交ル甚ダ丁  
 寧ニ、吉凶ニ情厚シ、大抵百姓ハ皆貧ニテ、男女共ニ耕  
 種ス、然レ、一般ニ男逸シ、女勞スルノ弊アリ、又一異  
 俗アリ、人死スレバ、三年ノ後、其屍ヲ墓穴ヨリ出シ、溪  
 水ニ洗ヒ、再、餘骨ヲ納ム、之ヲ骨洗ト云、冠婚喪祭ノ礼、  
 内地ト大同小異ナリ、婦人ハ大抵貞淑妬淫セズ、酒ヲ  
 飲マズ、然レ、文字ヲ識ル者少シ、五六歳女工ヲ習ハ  
 シ、十四五ニ至レバ、手指背ニ黥スルノ弊アリ、嫁スレ  
 バ、猥リニ男子ト面セス、再嫁スル稀ナリ、大抵一村内  
 相婚娶ス、男女相愛スレバ即チ配偶トナル、官家ノ婦  
 人、出レバ笠或蒙衣ヲ戴キ、馬ニ騎ルニ、兩足一鞞ヲ共



ニシテ、西洋婦人ノ騎馬ノ風アリ、港頭ニ娼妓アリ、頗ル  
 艶冶ニシテ、善ク三絃ヲ弄ス、又女子市ヲナシ、男子ハ  
 市セズ、年中ノ行事モ、内地ト畧同ジ、居家器什ノ制、内  
 地ト異ナルヲナシ、清潔ヲ好ム、茅屋多シ、或ハ赤色ノ  
 瓦ヲ用ユ、二階ナシ、床高ク湿氣ヲ避ケ、屋低ク颶風ヲ  
 防グ椅子ヲ用ヒズ、畳ヲ敷キ、之ニ坐シ、戶外ニ履ヲ脱  
 ス、園庭ニ、竹木小池ヲ設ク、大抵、礪石或ハ竹木ヲ籬ト  
 シ、家ノ四面ヲ圍ミ、馬廐、豚柵、鶏埒、皆此内ニアリ、官道  
 ハ、砌石ヲ敷キ、街衢ハ、清潔ナリ、器械ノ類、船舶ニ至ル  
 皆内地ニ同シ、但シ、太平山船ハ、長サ八丈餘、寛サ二丈  
 五六尺、櫓ヲ用ユ、漁夫ハ丸木船ヲ用ユ、輕ク迅シ、貴人

ハ米ヲ食ヒ、貧人ハ甘薯ヲ食フ、共ニ魚肉ヲ食ヒ、肉食  
 稀ナリ、最烟草ヲ嗜ム、茶ハ内地ノ産ヲ賞美ス、煎茶ノ  
 臺子式、行ハレ、羞膳ニ小笠原流行ハル、飲食料理、膳、椀  
 杯盤、烟盆、唾壺等、大抵同ジ、貴人ハ絹綿ヲ衣ル、貧人ハ  
 麻布蕉布ヲ着ル、服ハ寛闊ニ、廣袂ニテ長シ、帶ヲ約シ  
 一袋ヲ挿シ、烟具等ヲ納ム、足袋草履等ノ製、異ナラズ、  
 貴人ハ帽、傘、扇ヲ用ユ、賤人ハ露頭徒跣スル者アリ、婦  
 人ハ帶ヲ用キズ、二百年前ハ、頭髮ヲ剃セズ、今ハ頂髮  
 ヲ剃シ、外髮一圍ヲ留メ、頂上ニ蟠髻ヲ縮シ、油ヲ用キ  
 沐理ス、貴人ハ鬚髯ヲ長シ、賤民ハ禁ズ、婦人ハ髮ヲ剃  
 セズ、髻少シ前頂ニ在リ、簪ハ髻ニ挿ム、男ハ数本、女ハ

尊卑分嚴ニシテ貴族少年ハ太郎ヲ呼ビ次郎ハ松ノト呼ビハハト云フノハハト云フハ其尊稱ナリ大島邊ノ人名ハ内地ノ名兼ノ如シ中樂ト云ス

一本、貴人ハ金銀、賤民ハ銅鉛、真鍮等ナリ、元服前ハ長簪ヲ用キ、後ハ短簪ヲ用ユ、婦人ノ簪ニ、飾ナシ、國人ニ名アリ、姓ナシ、名ノ數、僅ニ三四十、故ニ同名ノ者多シ、然レ氏、父子ハ同名ヲ得ズ、祖孫ハ関セズ、其名字ハ、太郎、次郎、思次郎、思五郎、真三郎、或松鶴、龜等ノ稱ヲ用ユ、官吏ハ、別ニ漢字ノ姓名アレ氏、多クハ某地何官ト稱ス、久米村、閩人ノ裔、漢字ノ姓名アレ氏、別ニ琉球名ヲ常用ス、宴樂ハ、内地ノ猿樂、謠曲、雜子、義太夫等ノ俗曲、行ハレ、一般ニ、三絃ヲ弄ス、明清ノ舞樂、俗曲モアリ、又自國ノ古事ヲ演劇ニス、樂工、伶童ハ、貴人ノ子弟之ヲ習フ者モ多シ、樂器ハ、三絃、胡弓、琵琶、笛、小鑼、喇叭、鼓等

ナリ、又烟火競渡ノ戲アリ、碁象棋、行ハレ、宴會ニ、拇戰、杯アリ、永祿ノ頃、琉球ヨリ、蛇皮ヲ以テ張リタル、二絃ノ三、即チ今ノ内地ノ三絃ナリト云、

琉球新誌卷下 終

琉球新誌 卷下

因陋襲敝

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

琉球新誌跋

琉球開闢ノ始祖男女二神ノ名ヲ阿摩美姑ト云フ、一  
 書ニ、二神ノ名ヲ阿摩美久マミキ之禰利久ネリキトス、初メ、大島最  
 北ノ山ニ降り、史記及ヒ地理大國土ヲ求メテ、今ノ沖  
 繩島ニ到リ、地ヲ開キ、米粟ヲ播ク、其長男ハ、天孫氏ト  
 稱シ、長女ハ天神ト為リ、次女ハ海神ト為ル、云々、案ズ  
 ルニ、我神代ノ二尊、八大洲ヲ生メル後、更ニ六島ヲ生  
 ム、中ニ大島アリ、先哲ノ論、其所在ヲ詳ニセズ、今琉球  
 ノ大島ヲ覽ルニ、佐渡隱岐ニ比スレバ、更ニ大ナリ、蓋  
 シ是ヲ謂フ軟素蓋鳥尊スサノオミハ新羅ニ降り、瓊々杵尊ニギハヤヒハ日  
 向ニ降り、神代開闢ノ跡、皆西海ニ偏スレバ、彼ノ大島

ヲ指ス必シモ牽強ト云フベカラズ蓋シ阿摩美姑ハ  
 天孫氏ノ字訓ニシテ天御子ナリ之禰利久ハ或ハ姫  
 御子ノ轉欵瓊々杵尊以下ヲ天孫ト稱シ尊ノ皇子火  
 照尊ヲ薩摩隼人ノ祖トス隼ハ鷲鳥ノ名ニシテ古言  
 ニ又猛勇ヲ波夜トモ云ヘバ因テ名トス古史ニ琉球  
 人ノ猥惡ナルヲ説キ且薩人琉人ノ土音今尚同ジケ  
 レバ部人種言語見ヨ皆隼人ト同人種ナルヲ知ルベシ因  
 テ考フルニ火照尊薩摩ヨリ漸ク南海諸島ヲ開キ隼  
 人人種ヲ生殖シ而シテ天孫ノ皇族ナレバ即チ阿摩  
 美姑ト稱セシナルベシ且其初メ大島最北ノ山ニ渡  
 リ次ニ沖繩ニ到ルガ如キ尤内地ヨリ渡ルノ痕跡ヲ

見ルニ足リ又米粟ヲ播クハ瑞穗國ノ種ヲ傳フル者  
 ナルベシ火照尊ノ皇弟彦火々出見尊海宮ニ入り豊  
 玉姫ヲ娶リ居ルヲ三年ノ後豊玉姫ハ妹玉依姫ト風  
 波ヲ渡テ海濱ニ到リ産スル時龍ト化シテ去リ玉依  
 姫ハ留テ還ヘラズ是レ海宮ヲ琉球トシ長女ノ天神  
 ト為ルヲ豊玉姫トシ次女ノ海神ト為ルヲ玉依姫ノ  
 去テ還ヘラザルニ考フレバ共ニ火照尊ノ女トシテ  
 正ニ相合ハン其叔姪相婚スルハ上古ノ常ナリ而シ  
 テ彦火々出見尊以後海宮ノ往來絶エタリト見ユ大  
 隅ノ覺島社ハ尊ノ靈ヲ祀ル其遊漁ノ故跡ハ今ノ覺  
 島ノ灣ナルベシ又沖繩島ノ人自ラ屋其惹島ト稱ス

是レ沖ノ島ニテ、古ヘ洋中ノ島ノ意ニテ稱呼シ、後ハ  
 ラナハニ訛セルナルベシ、琉球人著ハセル中山世譜  
 ニ、舜天姓源、號尊敦、父鎮西八郎為朝公、母大里按司妹、  
 南宋乾道元年乙酉、為朝至國、生一子而返、其子名尊敦、  
 長為浦添按司、後國人推戴為君、是舜天也、云々、案スル  
 ニ、保元物語ニ、二條帝永萬元年、為朝鬼島ニ入ルトス、  
 即チ乾道元年ナリ、或云嘉應二年、為朝伊豆ノ大島ニ  
 死スル時、季子大島二郎為家、年五歲、其母抱テ逃レ、琉  
 球ニ入ル、是レ即チ舜天ナリト、蓋シ嘉應二年五歲ノ  
 文、舜天文治三年即位、年二十二ノ文ト、適ニ相符合ス  
 レバ、果シテ一人ナレバ、其孰力是非ヲ詳ニセズ、又保

元物語ニ、島人ノ衣網ノ如シ、太キ葦多ケレバ葦島ト  
 名ヅク、伊豆ノ大島ニ還ヘルニ及ンデ、絹百匹ヲ納レ  
 シム、云々、蓋シ、琉球ノ地、所在ニ竹多シ、葦ハ竹ノ一種  
 ヲ誤レルニテ、衣ハ芭蕉布ナラン、又此時為朝既ニ、八  
 丈ヲ略取スレバ、八丈ヲ除テ此辺海ニ、毎歲絹百匹ヲ  
 納ムベキ島ハ、琉球ノ外ニ有ルヲ見ズ、又國人為朝ヲ、  
 日本人皇後裔大里按司朝公ト稱ス、為朝ノ外人皇後  
 裔ノ人、此島ニ入ル者、恐ラクハ無カラン、大里按司ト  
 アレバ、逃レテ此島ニ終ル者歟、且舜天始メテ伊呂波  
 ヲ制スト云ヘバ、邦人ノ裔ナルヲ、論ヲ待タズ、又今王  
 府第一ノ寶劍ヲ、重金丸ト名ヅク、是レ蓋シ、為朝ノ遺

物ニシテ、源家ノ寶刀タリシ者ナルモ知ルベカラズ、  
以上鄙考ヲ録シテ以テ、此篇末ノ跋ニ代フト云、  
明治癸酉六月

平文彦 記

此の跋は、源家ノ寶刀タリシ者ナルモ知ルベカラズ、  
以上鄙考ヲ録シテ以テ、此篇末ノ跋ニ代フト云、  
明治癸酉六月



東京大学文学部蔵

15765

